

## 関連学会印象記

# 第59回日本胸部外科学会定期学術集会

本 村 昇\*

2006年10月1日(日)から4日(水)の4日間にかけて第59回日本胸部外科学会定期学術集会が開催された。会長は東京大学医学部心臓外科呼吸器外科の高本眞一教授であった。本学会のテーマは「医の原点からの新たなる挑戦」とされた。医の原点とは何かを振り返り考えながら未来を見つめる胸部外科を模索する学会である。参加者数は学術集会が3057名、Postgraduate Courseが915名、その他海外招請演者や特別会員などを含め、総数4131名となり過去最高の参加数となった。

本学会ではこれまでの学術総会と違ったいくつかの特徴を持っていた。まず、日程を土曜日のPostgraduate Courseから含めて4日間とし週の前半にしたこと、Postgraduate Courseの内容をこれまで以上に充実させかつこの中に医療政策を盛り込んだこと、ハンズオンセミナーをより充実させ人工心肺にも拡大したこと、外国人特にアジアの先生方を多く招聘しアジアの中の日本を考えるべく工夫したこと、胸部外科女医の会を始めたこと、などである。また、演題募集に当たり例年その締切が延期されることが暗黙の了解との雰囲気であったが、今回は演題締め切り日は厳重に守られた。事務的な点では、胸部外科学会としては初めて入場登録に自動券売機ならぬ自動登録券発行機が導入され、registrationの効率化に一役買った。

これまでの学会は週の中盤から後半に行うことが多く評議委員会などを含むと1週間全てがつぶれてしまう事も多く、学会が水曜日に終了するよう配慮した結果このような日程になった。Postgraduate Courseでは、講師陣が若手中心であ

ったこれまでと異なり、欧米並みに、「レジデントから教授まで」をモットーにこれさえ聞けば現在の胸部外科が全て鳥瞰できるよう、講師陣に現代胸部外科を代表する先生方を配し、かつ、ご自分の業績だけでなくglobalにレビューしていただくこととした。その結果、Postgraduate Courseへの参加数がほぼ千人にまで及び大盛況となった。また、医療政策コースを盛り込み、医療がどのように構築されどのように変貌していくのか、そして胸部外科の現状解析としてvolume-outcome分析を行った。これまで蓄積された当学会アンケート調査のデータを詳細に検討した結果が報告された。Postgraduate Courseの中に挟まれるように医療安全講習会が催され、多くの参加者が訪れた。この1日目の最後にMICSと呼吸器疾患最新テクノロジーが開かれ、海外のTechConに相当する集まりが持たれた。また、ここ数年恒例化したデータマネージャー会議も開催された。

2日目朝に開会式がありいわゆる定期学術集会が始まった。プレナリーセッションが1つ、シンポジウムが5、パネルディスカッションが4、特別セッションが5、ディベートセッションが4、ミートザエキスパートが5、イブニングセミナーが2、と数多くのスペシャルセッションの中にも凝集した討議がなされた(図1)。特別セッション1では各国の心臓外科手術データベースに関する討議があり、日本からも初のrisk adjusted mortality算出が報告された。昨今の表面的なランキング本に一石を投じる兆しが見えてきた。会長講演では、会長ご自身がこれまで歩んでこられた道を紹介するだけでなく、「医の原点」に立ち返り心臓外科医として何ができるか、またそれ以上に人間として何ができるかを謙虚に

\*東京大学医学部心臓外科

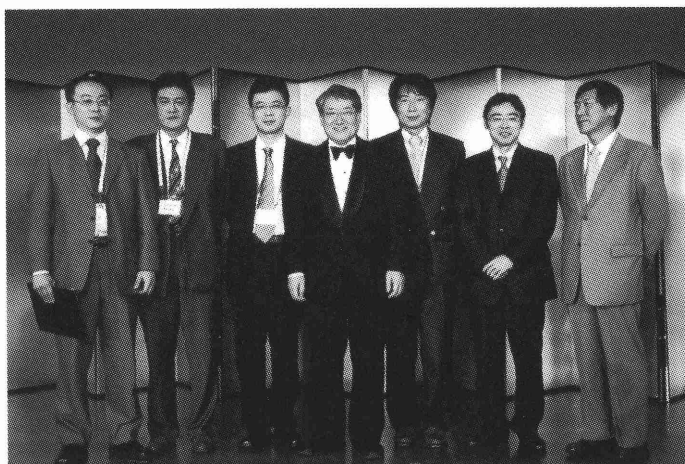


図1 プレナリーセッションでの表彰式



図2 会長講演

考えればおのずから道が見えてくる、との講演がなされ、本学会最高入場数の600名が拍手を送った(図2)。ハンズオンセッションは3日間開かれ、冠動脈、弁膜症、大血管、先天性、呼吸器、食道、そして人工心肺の7つのコースが設けられ、連日大盛況であった。先天性コースではあらかじめVSDを作製されたブタ心臓が配られ、基本手技とtipsが披露された。人工心肺コースでは、心臓外科医と人工心肺操縦者(多くはMEなどの技師達)が組になり、非常事態での冷静な対応法をチームとして学ぶようプログラムされており好評を博していた(図3)。

3日目には特別セッション2として、国際協

力に関して討議された。この中で、アジア心臓血管外科学会理事長 Dr. Furuse, アメリカ胸部外科学会 STS 会長 Dr. Grover, 国際 ISMIC 会長 Dr. Wolff, ヨーロッパ胸部外科学会事務局 Dr. Sergean などアジアと欧米の主要学会長が一堂に会し、世界の大陸を越えた協調関係をどのように構築していくかが熱心に論じられた。2007年1月に San Diego で行われた第43回アメリカ胸部外科学会 STS Annual Meeting では Dr. Grover がその会長講演の中で国際協調の話をなされ、その際に本学会での集合写真が大きく取り上げられた(図4)。

この間に外国からの招請講演者を中心にディナー

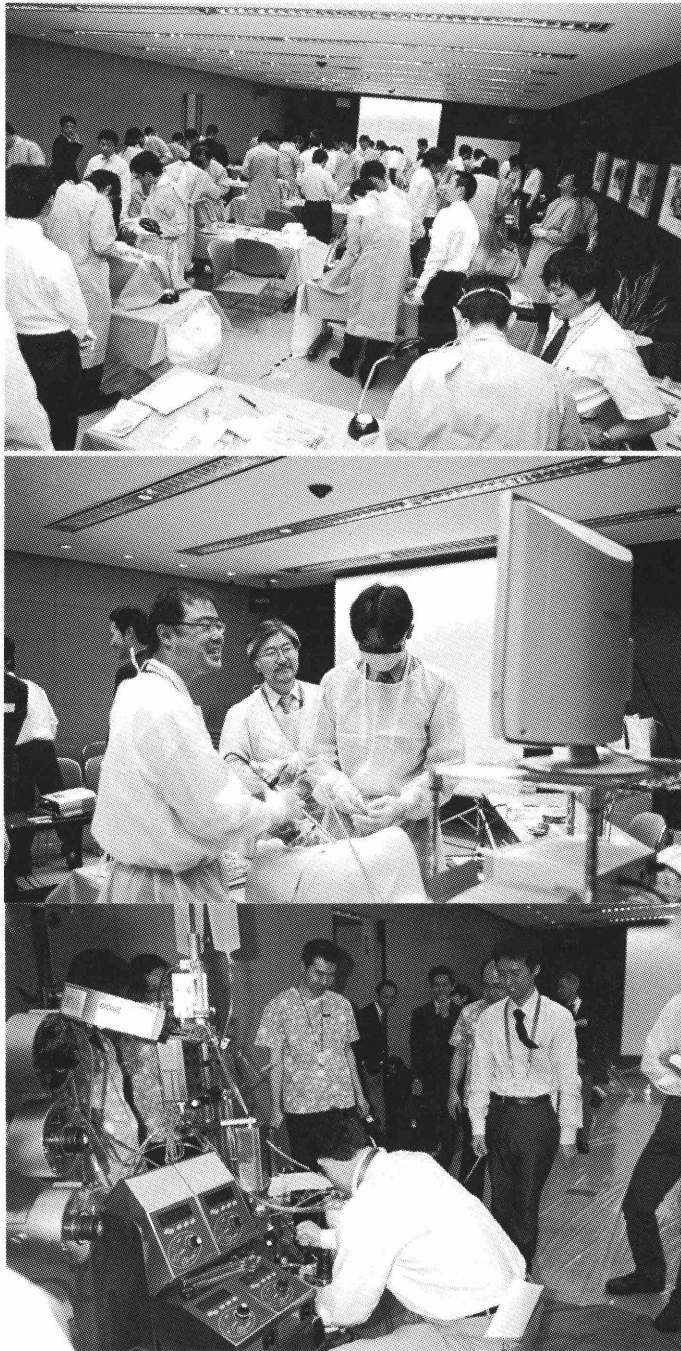


図3 ハンズオンセミナー

クルーズなどのアトラクションも行われ人的交流を深めることができた(図5)。

最終日の4日目にはディベートセッションが開催され、閉会式にて無事終了した。この閉会式の後にデータベース講習会が追加され、また、本学

会で初の試みとなった胸部外科女医の会、Women in Thoracic Surgery (WTS)が開催された。米国では10年以上も歴史のある会で、日本の胸部外科領域でも女性医師が増える中、問題点や協調性を議論する場として開かれた。今後の発展を期待したい。



図4 集合写真



図5 ディナークルーズ

本学会を振り返り、様々な新しい試みがなされ、それがうまく学術集会として output できたのでは

ないかと思っている。会長のポリシーが、想いが随所に込められた会であったように思う。